

■しまゆむた

奄美の民俗文化の事例

～徳之島井之川和田キヨ姫の生活史（1）～

本田 碩孝（徳之島郷土研究会会長）

0、はじめに

徳之島井之川で正月の祝いや年の祝いなどで歌われる「一番口説（くどうき）」の9番に「九番や 九十ぬとうしなりば むぬう めいさまぎま うめいわしてい わろてい 福ゆうや うめいしろさ」（意識・90歳にもなれば様々な物思いも忘れて、笑って福々しく過ごすのが幸福である。（注1）とあるが、誰も加齢に従って多くの生活体験も忘れていく。ここでは叔母（大正7年生、母の妹）から御教示いただいた徳之島井之川の生活史の一部を報告し、奄美の民俗文化の覚書としたい。

2005（平成17）年11月17日（木）と1982（昭和57）年12月28日に採録した一部である。

凡例

- 1) 日常的なしまぐち（島口・方言）の記録を企図しており、逐語訳は繰り返しもあって煩雑なので意識と若干の解説も加えて後方に記し民俗文化の理解ができるようにしてある。
- 2) 地名など民俗語彙にカタカナを使った場合もあるが、他意はない。
- 3) 録音テープを翻字しており、聞き取りにくい所など□のままにしてある。
- 4) 10余年間で話し方の変化の分析など関心はあるが、資料の紹介にして置く。
- 5) 共通語訳は方言と対応せず意識である。

注

- 1) 全国神校会広報誌『絆』第4号横浜健二著「島の人たちの心を育てた島の歌」（2002年）を参照。

1、身近なこと

—うりや わきゃあまゆか いくち し
ゃー だれんが（母より何歳下ですか）。

いちち うっとう。っいやきや あま、
うとろっか健康だ。まがりま やまっ、く
しま やまんせね。わーきやや まがりじ
ゃ、くしじゃ ふーん。わきゃ まがりじ
ゃ、くしじゃ やんとか ふーあんよっ。

—うりや あんとう にちよ。あま（な
べ志や）とう 似ちだれんよ。

わきゃや まがりま やみ、くしま やー
でい、ふーん だーかま あっからんだ。

—フーヤぬあんま うがしあれたがや。

（意識）「あなたは、私共の母より何歳した
ですか」と質問。5歳した。君達のお母さ
んはすごく健康だ。膝も痛まない、腰も痛
まない。私は、膝や腰など痛い（病む）と
ころが多いからね。「あなたは、祖母と似て
ね。お母さんと似たからですよ」。腰も痛み、
それで、どこへも歩けないよ。「祖母もそう
だったね」。

叔母は、腰がかなり曲がって「地面を拜ん
で歩く」と言うほどである。

2、薪売りのこと

はんぎい じぎゅうが ふーあんぬ。
タムンはんぎいたり、ムミドーラはんぎい
たり。山行じ タムン はんぎいていち
かつしゅんまるきぐわ（輪が30～40cm大）
みまるきし 15しん。はーっ、うっしゅて
い し
ー売りゆたしがや。

——15銭し たーきゃヤんきゃぬ こーゆ
む あれたんが（東の径は30cm大）。

ゐーん、うまな富澤医者ち をうたんせね。
かっしゅん まるきぐわえっ みまるきし
じゅーごしんだ。ばーちゃんが こーいが
ちか、「ついやーきゃタムンぐわや やーら
ダムンなてい、くわダムン むっちち 売
れ」ち。わーきゃや、ハナキとか、アサグ
ルとか がるダムンぐわ切ったぐらち か
し売ていか、ばーちゃんが、「めーりゐん
めいが ねーむなてい、フカシとか、うっ
しゅんくわ木い切ち ちか いんめいろあ
しが」ち。ハナ木いとかアサグル切ち む
っち行きあんせね。うがしま、切ちち売り
あんせね。金いもーきいやねんせえっ。う
がしま はあんぎいていち売るんわけい。
難儀しーあんだ。

——うりや、あーとうき 行きゅんわけい
だれんや。山や、だーやまだれんが。

トーヤマ、サラシンチヂち言ち、タギノ
ぬういーぬ山ぬあんせね、サラシンチジ行
じ、切ったぐらし。はーっ難儀や さんだ。
かっしゅんまるき みまるきしどう 15し
んだ。

——うん15しんや ぬーな ちこゆむあれ
たんが？（以下質問の意味を理解していな
い）

富澤医者ぬばあさんがこーいが きゅー
たんわけい。アサグルとうハナキイとうあ
んせね。はんぎいていち売りなていや、生
木い（同じことを繰り返すので話題を変え
た）。

（訳）腰が痛くて曲がっているのは背負う仕
事が多かった。薪を背負ってきて売った。
木にはアサグルとかハナ木などの軽い木が
ほとんどで買い手のおばあさんから、「すぐ
燃え尽きるので重い木を持って来て売れ」
と。3束で15銭だった。富澤医者の家で買
ってくれた。

富澤医者は後年、天城町平土野に引越した。

3、魚すくい

——うりや、うんかちま 行けるたんぎや。
うん行じや。朝しゅ なていか（下）久志
うんかち行じや、久志うんかちツイユし
きが行きゅたんだ、わきゃ。あーとうき
ふえーあ県道から あっからむなてい、う
んなげーし行きゅたんだ。うんなげーり行
じ、ふーう ツイユしき行じか。石ぐわ
いんかちか、石ぐわぬ さーから セぐわ
かち ちようかっしゅんべ（5cm位）ぐ
わしゅんアイヌクワ、アイヌクワぐわしち
か。セーむっち行じ。カブリち言ち、山ぬ
カブリむっち行じ、うり セな くんぎい
ちけいてい、くんぎちけいてい うがしッ
イユぐわ しちか。石ぐわ むっっちゃぎい
ていか 石ぬさーぐわか。かしし ふへ
るむんま をうーり、ひんぎるむんま を
うーり。ひんぎるむんや、うん石むっち
しきゅわ、ちゅーけり ひんぎたんツイユ
や、絶対もう、せんきゃかち ふへーらむ
だ。またひんぎりどう しゅんぬ。かっき
んべしゅ（5～6cm大）アイヌクワぐわ
いちち、むーちべぐわ。ふーん かっさべ
しゅツイユぐわ とうていちえっ、汁ぐわ
わーち くわんきゃに かまちゃり、汁ぐ
わ ぬだりし。はーっ、金いや ねーり、
ツイユこーゆ金いや ねーり。しちち、汁
ぐわわーち ぬだり（繰り返すので省略）。
（意訳）「海にも行ったでしょう」。朝方に潮
が引くようになると下久志の海（大きな礁
湖になる）に魚すくいで行った。道具はセ
（竹ザルの一種）にカブリ（カズラの一種）
をくくりつけ、疑似海草にする。魚はアイ
ゴでスクが少し大きくなったもの。捕り方
はクモリ（礁湖）にある平石などの側にセ
を構え、石をセの方に動かす。アイゴがセ
に入るとすくいあげてテイル（竹籠）に入
れる。

4、魚捕りの時期

——ツイユしきがや、いちんべ行きだれんが？

あーとうき 4時、5時。

——なちだれんど 冬だれんど？

なんべべじゃや、9月、10月なていか、みんちりアイヌクワぬえっ、かっきんべ(5~6cm)なるんせね。9月、10月なていか、うがしうんツイユしきが行きゆたんわけい。ツイユま いくわい かし石ぐわ むっちゃげいていか 石ぬまりぐわから ちっち ふへるむんま をうーり ひんぎるんむんま をうーり、また向こ行じしきゆんちしま ひんぎりどう しゆむんだ。ツイユま たまし あたんだ。ふーん、うっしゆていツイユが しちちかえっ、かっきべなしゆんツイユぐわ、アイヌクワぐわ(注1)、けーへんべしゆんツイユぐわしちちか(繰り返すので省略)。

(意訳) 魚捕りに行く時刻は朝が早い。明るくなると魚も警戒して逃げるからだ。時季は新暦10月頃でアイゴが大きくなっている。何回か逃げている魚はなかなか捕らえられない。賢くなっている魚もいた。

注

1) シュク→モハン→ワタブタ→アイヌクワ→フルアイヌクワと成長過程で呼称が変わる。旧暦5月28日に1回目に寄るといふ(松山光秀著『徳之島の民俗』未来社2004年53頁)。

5、魚をつかむ

——ミンギユヤ行けらだていや。

ゆる、ゆるや、みんぎツイユヤサドゥメ。石いんかち、しき。石しき しゆたわ、しちあつきゆたわ、石ぬういーなサクチぬをうたんちよ。うんサクチが、ひんぎてい行じや、「あねー、うんな うーツイユぬ をうていあむえー」ち言ち、うがしゆていさんくとうきやま あたしがえっ。うにん

や、月わにやわにやていてい、月ぬゆる。うりや、サードゥバリぬさーだ、サードゥンバリぬ港、うんな浦ぬあんせね、うま行じ しきゆたんわけい。

(意訳) もっと寒くなると魚の動きがにぶくなる。シマではミンギツイユ(魚つかみ)という民俗語彙がある。キヨ叔母の体験では魚すくいと似たような漁法であった。

サクチ(ボラの大きくなったもの)がいたのに逃がし、残念だった。

ミンギツイユ(注1)は月の照る夜に行った。井之川佐渡の下の海での記憶があった。

注

1) 2007年に一番寒い日に徳之島井之川での室温が12度であった。昔はもっと寒かった感じがする。そんな時期に浅い海水溜りでは魚がこごえて動けないでいる。それを捕まえるのが本来のミンギツイユだろう。シツクツイユとも言うが(拙編「徳之島井之川の民俗誌稿—泰良豊重氏の生活史を通して—」『鹿児島民具』第17号2005年67頁)、違いなど課題。

6、魚とりの仲間

——たんとう行きゆむんあれたんが。

トゥミアキあま。トゥミアキぐわあーまとう たーりし行じか、「ふーん、ひんぎてい、ひんぎてい、しきやらん、しきやらん。」ち、トイミアキぐわあーまや言ゆたしがえっ。うっしゆていミンギツイユしゆんち しゆーたしがえっ。ミンギツイユち 言ちゃんてい、セむっち行じ しきどう あんぬ、みんぎや絶対さーらむ。しきが行じか、サードゥバリちゆんきやぬ きしゃ ちゆっけり むーるしちあむなていなていあねー、しちあむなてい。わきゃが、しきが行じか、一応ひんぎたんツイユや、全然、ひんぎりどう しゆんぬ、せんきやかち絶対ふへーらむ あたんだ。

——冬ぬしぎよろ わっちきだれんや。

9月、10月じゃやっ。サードウバリぬ港ぬあがんほ一なあんせね。うんか しち、イジリシュかちち、うんか あげれうんかち行じかアゲレウンたな行きゆたしがえっ。アゲレウンや、全然、クモリや全然ツイユやとうららむなてい。

(意訳) 魚すくいのはれは叔父藤福秋の妻であった。井之川の小字佐渡の人びとの後など競争で探しあった。佐渡の下の方から小字宝島の方にあるアゲレウン(直訳・東方の海)まで行くものだった。アゲレウンのクモリ(礁湖)には魚はほとんどいなかった。

7、木の種

木いんたねい、山ぬ木いんたねい むっちち、けいごいーるんわけい。ちゅーぬいーたん くもりな いーたんてい メイツキリウブちゅ をうらんごあね。うんから、頂キヨばあが、「えーっ、うんクモリやわーきゃが みきゃ前どう いーたしが」ち。ちゅぬ いーたんクモリな いーたんてい ぬーんま をうらんせね。かつしゅん くわーツイユぐわぬ をうたんちよ。メイトウラウブぬ をうむなていえっ、ツイユぬをうんがら あていねんち。ふーん うっさ いーたんだけいどう あんぬ、クモリぬな一な ぬーんま をうらん。うんな にやったんしこぬ ツイユぐわしかをうらんごさーしがえっ。

——ムーしぐり しゅーれたんあんぎや。

(訳) ツバキの種を取り、臼でついて粉々にしておき、持って行く。クモリで洗うと魚が酔ったようになりフラフラ出てくる。トビハゼなどは飛び出す。どこにでもいるハゼすらいないクモリにいった失敗談である。以下は1982(昭和57)年12月28日に御教示いただいたものである。民話に係わる伝承が主である。

8、運定め話—ノミの運—

セエクしぬ ヌミよ。

——一番初めいから しーたぼれ。

一番はじめいや、ヤーブシしーどんかちがら、大工しゅんとちがはら。ヌミぬはんていりなてい、ちゅぬヤーじゃやっ。うがん行じゃんとうからやっ。くわーはんげいてい くわーむりし。(ちゅがはら、やぬちゅがら、うりや わきゃ わからしがや)行じゆたんとう。ういーからヌミぬ はんていていちえっ。うんくわぬ上いかち、おっかんかち あたてい うんくわ うんなてい即死さんちがあら。ちゅーめいじ さんち。ちゅーめいじ さんちがら、いきやしさんちがら。

「ヌミに かまったん、ヌミにかまるん」ち言ち。

うがしなてい、また、うり 詳しあんちゅぬ をうんはじど。わんが聴きゆか かわりちゅぬ。

——ヌミにかまるんち言ちゅーむんを だーなてい聞ちゃんち言ちゅむんが分かていかちゅーたんわけいだれんよ。

うりが ヤテバンしーどんなてい。ヤーぬ みやげえ葺きどんか ヤテバンしーどんやっ。ういーから はんていりなてい。

——な一さきぬ ついヤーじぬ話や(運定め話)、うんかち うー雨いふりぬ とうき聞ちゃんち言ちゅれんたんせー(ぬん)。

(意訳) 大工のノミよ。「初めからしてください」。家普請しているところへ、大工作業をしている所だったろう、子守りをしている人が子どもを背負って行った。そしたら、上からノミが落ちて来てね、その子の上に、頭にあたって、その子は即死したとか、即死したって。即死したとか、どうしたとか。「ノミにかまれた」と言ち。

「運命の神」(『挿神記』—干宝撰、竹田晃訳、東洋文庫10平凡社昭和53年374頁参照)と一部が似ている。

9、神の乗り馬と罰

神様ぬまわてい、名まい。たんがいー(たんがら うんちゅぬ名まい言ちゃしがえっ)。わきゃ名まいわーしてい うべいら(かもえらんど)。うん神様や、くんでや山ぬ神様ぬ いちか ぬってい あっきゆるツマ。ツマあたんとうきや。くんでや、ある獵師が、うり射ーたんとうきや。うん獵師や井ノぬちゅぬ名まい言ちゃんべやっ。井ノぬちゅぬ名まい言ちゃんとうきや。本当や、うり ありま さーむん。うり あらむ。うんから、うんちゅや うむさんちがら。神様 いきゃしさんちがはら、ちゅーめいじ さんちがら言ちゆたしが(夫栄良氏「井ノぬギマサち言ちゆたし」)。「井ノぬギマサがどう さんぬ なんや あらん」ち。ちゅぬ名まい言ち「なんや、あらん」ち。うがし、わきゃにゃーや、うっしゅてい言ゆんちゅあたしが(トウミアキあじゃだれんや=藤福秋ですか)。あん(はい)。ケイドウぬギマサちがあら。井ノちがあら、「なんや あらり。ギマサちごろはどう射ーたんちえっ。わーや、あらん」ち言ちゃんとう。とうとう うんちゅや、名まい言ちったんとう 射ーらってい。ヤマシ射ーりま さーむん。神様ち言ゆーむんや、鉄砲しうちや あらり。かし指さーちか、うんちゅや くげえとうむち。杖しやっ、かしぬちかやっ、ぬかっていか きさ うんちゅや(死ぬ)。

神やしじが たーむんなてい、ぬきだけし、きさ あーむ受けいとん わけいあし。ぬち言ちか ゆーたんが。

(意識) 神様が、乗り馬である猪に乗ってまわっていた。ある獵師がそれを射った。そして射った人は、「射ったのは井之川のギマサであり、自分ではない」と言った。名前を言われた人は神に射殺された。神は鉄砲などで撃ち殺すのではなく、持っている杖で指す(ぬく)だけで人間などは死んでし

まうそうな。何と言ったらいいいのかね、神は靈性が高いからだ。言われた人は命まで落し大迷惑だ。

10、犬呼び石

インゆびい石なてい。ワシゴーなてい。ワシ池いか あっきゆんイン かしあびいたんとうきやがら、うりが うどうていち、あむさんち話ぬあんせえっ。ついゃーうりあていねーや(君はそれを知らないか)。——始めいか しーたぼれ(始めからして)。あの一、山かち行じゃんとうきや、ヤマシに つうつわていやっ。ひんぎりかぎりさんとうきや。ぬが ありインゆび石ち言ゆーるちか。あん石かちぬってい。ぎりぎりにちゃんていぬ □ま ねーり。ワシにちゃんとう、ワシ池いから インが あっきゆたんとうやっ、うりが ふいーしがら あびいたんとうきや、うんインがうどうてい しっち。うんヤマシをば うい払ろていやっ、うがし ひんぎゃちゃんとう。うんちゅや助かったとう。うりしインゆびい石ち。うがしゆん話しゆーたしが。「ぬが、あがしインゆびい石ち言ゆーるやっ」ち。インあびいたんとう、うがし インゆびい石ち。

(意識) 井之川岳に大きな岩があちこちある。そのひとつが「犬呼び石」である。その名の由来話。昔山に行った人が猪と出会い追いかけられた。岩の上に登って周りを見てもどうしようもない。和瀬の方を見たら和瀬池(2007年現在は埋め立てられ創価学会の施設が建てられている)の土手に犬がいる。犬を手笛で呼んだら走って来て猪を追い払ったから助かった。それから「犬呼び石」と言うようになったのだそう。

ところが、別の話では「狩人が見失った犬を呼ぶために登ったもの」になっている。池は和瀬の隣村「諸田沼の堤に蟻ほどに見えた」。「後に、或る狩人が果たして犬が集

るかどうかためすつもりで、岩上に立っていくつかの犬の名を呼んで見た。・・・」(『西郷隆盛獄中記 奄美大島と大西郷』昇曙夢著坂元盛秋編 新人物往来社 昭和52年146頁)。筆者も諸田池と聞いていた。実際に岩から諸田池を見て話を想った。まだまだ採録の必要性がある。

11、神の鴨捕りじゃま

ぬっちがや、グシ。グシ立っていてカモとうり。グシし しゅーむん。ぬっち言ゅーむん あたんがやっ(カモサシ?)。カモとうりが行じゃんとうきやがら、ういーから天とーがなしから、シューちカモや飛でい あっちゅむなてい。なっ、さーかちうりるむなていち待ち しゅーたんとう。かし うりるんちしゅんとおば、いきやしがやちか、ドシーンちあぶしぬ うとうぬかし しゃーんとうきや。カモやパーツちうりるあぎいぬむん すぐん飛ぶいじゃち行ちゃんとうきやが。うんがなーちゃ行じにちゃんとうきやが、ふてーううー足跡ぬあたんち。神様や足ぬ形やねーしがいっ。うりや ちゅぬじゃましーあらんかや。うがし、昔や神様ぬカモううーてい カモうむしゅむ あたんち。

現在ぬ人間どう足跡やあんぬ、神様ぬ足跡ぬあつかやち なっ、うがしに思いちよ。われんぐわあり うっしゅん話聞ち。

(意識) 昔は、田に竹串にトリモチをつけて刺し、降りて来る鴨の羽にひつつかせ、飛べないようにして捕まえるものだった。田に行くと、鴨は空を飛び、降りて来るような様子であった。鴨が降りようとしている時にドシンという音が畦の方でしたら、鴨は飛びたって行った。翌朝行ってみると、大きな足跡があった。神様なら足跡を残さないはずだが。人がじゃましたのだろうか。昔は神様がカモ猟をじゃまするものだったって。

12、神と出会う

うがし、また、鴨ぬはんているはぎどっちあむ山な かつくとうたんとう。(うりや、マシクニにやしが。うりやわきやマチさんが話しあたしがえっ)。なきやじが言いぬ、鴨ぬ きゅんど、きゅんどち、ワラビ山なてい、かし しーでい しゅーたんとう。うにん山ぬ神様ぬ、杖(注1) カランカランカラン鳴らち かし うりてい きゅーむん あんべちよ。うりてい きゅーたんとう。

「神様ぬきゅん」ち、むーるサナギちがんだかんでい よーり しゅーたんとう。ちゅりぬ神様やえっ、

「あーっ、あんな、ネイジミちがんだミヤウちがんだをうん」ち言ちゃんべ。しゃんとう、ちゅりぬ神様ぬやっ、

「ひんぎやし、ひんぎやし」ち、うがし言ち、うりたや くだーり アーディングモリかち。昔、アーディングモリかち行じ網ちきるんち言ゅーたんせ。網ちこいちがら(語り手笑いながら)、網ちこいが。ぬっちがら(近所の人が来訪。次項13へ)。

(意識) 鴨が降りて来るはずだと巖山に隠れていたたら、神様たちが杖をカランカラン鳴らしながら降りて来た。「神様が来る」と禰をかぶってじっとしていた。一人の神様が、「ほう、向こうに兎だったか猫だったかがいる」と言った。もう一人の神様が、「逃がせ、逃がせ」と言いながら神様たちは降りてアーディングモリ(注2)へ行った。アーディングモリでは神様たちが網を使って漁をされると言われる。

注

1) 杖は方言(島口)でグシャンと言うが、ここではつえと共通語で話している。

2) 井之川岳からの尾根の先端の岬になっている所にある礁湖。遠方から見るとクモリ(礁湖)の周りを火が廻って

いると言う。集団で見た事例を報告してある（拙編「徳之島井之川の民俗誌稿—泰良豊重氏の生活史を通して（二）—」『南島研究』第46号2005年14頁）。神とケインムン（妖怪の一種）との火が時代により同一に見えるようになってきたか、解釈するようになったかもしれないが課題。

13、来客との話

（1）挨拶や健康のこと

和田：いっち もーれ。いーとん（かちちやーが）。くりま、ゆっ あていあーり。きゅーや、やーとう下がとうり（血圧が）。

客：うっこい さーや（めん）。

和田：血圧は一らちやり、また、のこりめんきや こーたり（めん）。

客：うーぐとう あらり。みーちがりやっ。ちよーしもていー。しるから きゅんちしゅーたしが。ぬが どうぬ いしゅーがし。

あびりあてい しゅていか ゆたーあたが。

和田：しょうーがち いしゅがー。手いの一ていせ。

客：つわー手い の一てい きゅ。くねだま ホーレンソウ・・・。

おとさん きゅや もーらやっ。

和田：わきや あじゃ だんかかち。などう ゆうふい（夕食）かだが。なんぐわ語たろていねえ、つあり。ついやーんまゆうふい まおろ なーかや。

（意識）筆者が話を聴いている所へ来客があった。和田「入っていらっしゃい。良い所に来た」。

血圧のことなどが今までの話題になっていたようだ。「下がった」。他の用事なども含めて行って来た。お互いに正月準備で忙しくしていた。和田「手は治ったの」。「治ってきている。夫の栄良さんは」。和田「夕食を食べたばかりだが、どこかに行ったら

う」。和田「語ってごらん。夕食準備は今からかね」。

（2）赤肉の保存方法

客：めん（なーかや）。ツワシ いきやししか ゆーんが。シュ しゅきどう ゆたーわ。

和田：シュしか からくならめい。

客：いきやしがいー。冷凍な くわらし？

和田：くわらさんまち（思とうしが）。

客：赤肉（注1）くわらちか、っゆーくわく ならんせ。

和田：木いーにし なりよ。

客：□やはらん。

和田：わーきやま赤肉んきや、あちゃこーやしよ。

客：わーきやま なーんぐわどう こーていあつ。

和田：ありえっ、むちから やらはんだ。

客：赤肉。

和田：赤肉ま ぬーんま。

和田：あんローズんきやえっ、いちゅしぜーとう しっからまち。はじめい アマジオぐわ しーやっ。いちゅし ぎりーぎり木いにしなるっか からまち。うがしうちかやっ。うん肉や とうけいりまさんぐうとに っまーあん ぬんかにしゅん。カメイジぬスインぐわやっ（に習った）。

なーかち いっちねえー。

客：ゆっくり しーしまんされ。

和田：ぬが、はなち行じたーんぬ。（肉）や冷凍など入ーてい あんだ（冷蔵庫な）。冷蔵庫ぬしやーぬ冷凍な。

客：わっ、しかま こーていちあつ。

和田：ついやー牛ノか こーていや。

客：わあー牛ノかよっ。牛ノーからまにやり こーやんま しまんされー。

和田：わーきや、あまから こーていちあつ。

客：あまや 安すいあんされ。

和田：安すいやよっ。

注

1) 赤肉をマシシと方言でいうが、ここでは共通語になっている。

(意訳) 赤肉の保存方法について意見の交換をしている。「赤肉を塩漬けするか」「からくなる」「冷凍室に保存するか」「固く味が落ちないか」「蒸すと良い」「甘塩して糸で木のように巻いて保管しておく、肉もくずれないで美味。固くなるまで巻いて保存すると良い」。長く冷凍などしないように直前に買った方が良いというのが結論のようだ。

買う場所は井之川より値段が安い所もあると意識している。

(3) 話の断片

客：うんかち いきゃしがらし、もーりさんがに しゅーたしが、うりや もーりしや うらんご いきゃしていごろあ 言ゅーたしがえっ。うり 話、いーあんべ聞ちゅていか ゆたーあたしがえっ。

(意訳) 海に行き、死んだようにしていたが、死んではおらず、どうしたとか言っていたが、よく聞いておけばよかった。

(4) 何才でも親は親

八〇(歳)あまり なりゆんうやぬ、六〇(歳)あまり なりゆりゆくわに、「きばりよ。頑張りよっ坊」ち、うがし言ちゃんち言ゆん話ぬあんせえっ。

どうや八〇、くわや六〇ま あーしが、難船さんとうきやが、うがし くわに いきゆい ちきるむ あたんち。うっしゅん話んきや 言ゅーむんあたんせえっ、昔ぬ話な。

とうしや、どーとうし。六〇とう八〇じゅーとうがりやっ。あむあしが、「気張り」ち、いきゆい ちきいてい。

うりや、わきやサダニにや(藤貞仁叔父・キヨの父の弟)がじゃわ。たんががら、

うっしゅてい話しゅたんで。

(意訳) 80歳余りになる親が60歳にもなる息子に難船したときに、「気張れ」と勢いをつけたと話していた。世間では老いも若きも同輩という考えがある。一般には60歳にもなれば分別もでき、言われることもないと思うがいくつになっても親は親だ。叔父が話したように思う。

(5) 客の帰り際

客：わきゃじーが、また うんとぬ カンニウシゲイ様とうシュダカンジャクちゅてい話さーり しゅーたしがえっ。わっていーちま聞き とうみいていね。ぬーあんべ聞ちゅていかえーち、なーいじ思ゆり。和田 ゆーぐわんきや あていま うねっ。客：っわっ、ゆーぐわ ぬみどっころ あら。かなげにしか、うがん あがてい くりが言ゅーむんま聞きゅしが、 あんなこーてい あむなていえっ。

和田：話さげいてい 行じたーむ。ヤー行じ あまじゅぐわ しゅーてい たーむ。

客：うがし しゅーかま。流しな うーむしーあむなていっちよっ。

和田：わーきやま こーていち、ちかはんねげいていあー。冷凍かち入ーらんま。

(意訳) 客「爺が島の伝説の話などしたが、よく聞き止めておかなかった。聞いておけばよかったと今頃思う」。和田「湯(お茶)でもどうぞ」。「飲む時間はない。普段ならあがって話を聞いたりもするが、買ったまま流しに置いてきた」。和田「話して行きなさい。家に帰ってから甘塩すればよい」。「そうしよう」。和田「買ってきて投げて(置いたままで)ある。冷凍室にいれよう」。

14、ヤスデの異名

——イフク?

イフクち、贅沢あらんせ。イフクトウドウラち言ゆんせえっ。

イフクトウドウラ。うりが ふーあんとー

や うがし言うしが、ぬーぬ意味し うがし言ーがんだ。いちか っまーむん はんくちか、ありや っまーむんな ちかるんせえっ。

何か意味ぬあんしじ あらんせ。っわっうがし思ゆんで。

本田 ヲウウイぬ さーきゃな をうんせえっ（桶の下などにいるでしょう）。

ヲウウイとか、ぬんくさ あーむしか、うんな わあい わあい あむしゆんせね。御馳走、ありや 贅沢、言ちから、むんに、豊富なむんに たりるむあむ。イフクトウドウラちがら、昔、言ゆーむん あたしが。（意識）ヤスデにイフクトウドウラという。どうしてか分からないが何か意味があったのだらう。桶の下などにいる。ヤスデにとって御馳走になる物が捨てられた所集るからね。

ここではテープに録音している分の一部の事例を提示している。分析などは課題である。

15、桃太郎

っいゃーきゃ じーから。あんぐわや こーかち洗濯しーが、じーぐわや山かち柴刈りが行じゃんとう。うりや昔ぬドンブリドンブリ ムーぬ流れいていちゃんちよっ、うりや。

（意識）君の祖父から聞いた。婆さんは川へ洗濯に、爺さんは山へ柴刈りに行った。それは昔の桃がドンブラコ流れてくる話よ。

16、終わりに

奄美の民俗文化としての方言の大変化は昭和40年代に私でも予測できた。すでに昭和20年代の前半（昭和24年頃）に柳田国男は「今に奄美方言が消えて行くから、それを採集するように」といわれたと、長田須磨姫は『奄美方言分類辞典』（長田・須崎名保子共編笠間書院上（1013頁）昭和52年、下（973頁）昭和55年）の自序で述べている。どれだけ奄美方言が記録されたか。